



正史
實傳

いはは文庫

二編
上

特
遠13
1807
4



門へ遠 13
希 1807
卷 4

いろはは文庫第二編の序

忠臣義士の列傳を、當世の長物なり。

人情の字々、女女子不令得、

實傳、孝女、婦を、是、小、か、え、り、

美、我、當、世、の、為、に、先、に、記、す、

真、は、及、古、あ、れ、後、の、興、証、に、中、に、

關門突入茂荊鄉

易水風寒壯士情

炭啞形衰追豫讓

悲歌淚滴挽田橫

精誠貫日死何悔

義氣拔山生太輕

四十六人齊伏

上天無意佐忠貞

卷之三

淚飯親鄉去輕身

右憲先碑

魄在臨山萬松禪

吉桑香傍通石

卷之三

用高



同盟

義士の
親族の本望
達せしむるを
告げしむるを
良雄が指規の例なり
後録倉小辰の義士と共
先刑と望み執政の命せむ
刺髪して同盟の

奥女中
松嵐

菩提を吊らふ

部家
女僕
茨木



塩谷高直
瑤心院
室

寺岡の
敵討の
光景を
注進
直さる
都趣

足利の
寺岡
右衛門
組



一文屋抱
柏木太夫

今猶存と談柄と
反問の奇謀英雄
人と欺と云ふべし



赤城を退太りて
都山科小居を占
酒色遊真を
能優
瀬川
竹之座
なと持
中止静らんと其頃世
聞えり酒後の徒と
愛放黨不瀬
比類も就中浮瀬の
酒杯撞木町の落書

大星良雄



越後守の御殿
 復讐の後、幼児を
 必罪と蒙る事を知り
 妻子一世の別と
 思ふ程に
 心の程を
 正久の
 琴の妙も
 夜討の妙も
 琴氏懐中
 優みやま
 せしむ

正久
 於妻
 放谷羊之丞
 政利



忠志金鐵の身
 親の心海斯く
 御製と人
 去後、尾院の
 老を
 けり
 我
 我
 我

伊曾代十郎左門
 正久
 松重子

武康の堀内源左門の門才
 高林軍兵衛討高田の馬場
 十五人討取る
 其後堀部の家小賢
 塩谷家の給仕
 終つて
 一世三度敵を
 撃つて今未開
 一個英雄



兵衛指南
 堀内源左門
 本名
 堀部安平
 武康

空太赤城窺敵部
 今宵誠及衆屯酬
 生肯擔扇賣草孰
 神與五郎獨則休
 梓弓倭の乃んき
 小ききききき
 豊海
 則休



本名
 神崎矢五郎則休
 本名
 美作屋金平

阿房
 則休



よる仲ふ東ハ山雲の雲さ入ききそとらる日ハ雲の氣
よたお座づこひの極類を四殿へりそぐき新へ表役人吹
きみて直ふお座の切戸よりそ人とせ来る水江を使の
大早のむねをうけ仇討場新よりそのまふよろこび勇
早つひ居いこれと老度見と 雲ハ 寺園の
平 居とぬでござのまのら平ちつめとござのまのら大早氏
うの山早歩 雲ハシラく首尾よく高堂の館へ平 さんく
用をさびしき高堂師直うく 客易あ歩入とらぬ
平 居とぬでござのまのら平ちつめとござのまのら大早氏
うの山早歩 雲ハシラく首尾よく高堂の館へ平 さんく
用をさびしき高堂師直うく 客易あ歩入とらぬ

所を幸万苦 雲ハ 山雲の雲さ入ききそとらる日ハ雲の氣
向景様へと見入る所へ泣き大やぐもこれと園あひて
ま出らぬと見入るも居の座を見入る 雲ハ 平
をうの今の子をいちく平 平 平
おのまのまのまの同盤四十九人寐合をせんせだ
身とくもらる甲斐文ごうて 略夜何れも子の平
けう 新地の 雲ハ 雲ハ 雲ハ
雲より二まにころぬあめくともなる 所存もま 也

門を破り申入り用盡さるの—
 名年がうらぐ人もついでに
 首うつて義烈の勇は只今
 小蛇とまつて体置らう—
 あだ〜〜〜けふは
 後室より女侍も歎きを
 あそこのもの—けれ美
 口焼とて此の—ごも

第八回

何とせう 昭は見えん
 の中にも—
 とう—

第八回

青園平右衛門の夜更
 後室より女侍
 早利根も辰の母長

この世にお屋の切戸より入る虫の付寺
西の邊を長崎の海に
見ると深より二人のさるふ後室を
平伏するものありしに
小者十余人

一 小櫃
一 帳面入
右の鏡をとりしに
帳面入

一 女箱
一 金九千両
山極側を存ひ入る寺西の邊に
お屋の切戸

撫者白くくの如くあれが
お屋の切戸
四十余人のこころ
お屋の切戸
お屋の切戸
お屋の切戸

さうしてさういふから二百石賜う二百石不申
とありしが二年目ふつうと伊勢赤宮とわづひ
上京して山科ふつうと在家材役人ふ新面一
中らの上りぬき居のる月かともふ寺西ふ支記と
鎌倉入ひる常も弥まが立合ふて苗も居一
人をさき村役ふ頼もその外系徳寺西ふ清持
されバ此度なふ後合して由良と助の宅地西
子も小賣持ひ唯二ふ四方の地を越し後年ま

百四十四

貞のち當堂より草堂を建て大里の石造り
造り

忠誠院又空澤劍居士

と立派な彫刻をさせ後山科ふ一の寺
男女の満ちく佳あちと信を頼み大法より
つら料を湖へて救百人ふつう手ひさし
保永元年二月行年六十二才大里の石造りの
のちそそ美のふ後を切く終りしとぞ鳴

そと 彼女みづかの舞まを如ごとく舞まうられを憐あはれ

え 是こゝは舞まひの如ごとく及およぶもあはら

いらんとまがみはまは舞まうる

あはれ 舞まひの如ごとく及およぶもあはら

あはれ 舞まひの如ごとく及およぶもあはら

あはれ 舞まひの如ごとく及およぶもあはら

あはれ 舞まひの如ごとく及およぶもあはら

あはれ 舞まひの如ごとく及およぶもあはら

あはれ 舞まひの如ごとく及およぶもあはら

あはれ 舞まひの如ごとく及およぶもあはら

あはれ 舞まひの如ごとく及およぶもあはら

ねのあや
顔さう

まろいぬ
本つきの

あが
大星

後宮にいらぬの國世にまむらたのちかへてあちうにた
甘うこもゆを甲余人のくくのこみは残さむぎう一何み
らえんものもきくはたあぐく信いも入るはあふのい
女中達後こきれど船が候きんこれともあふあふ

四十四

袖の後の露糸もれ信は山を委へ又おあうるま
肉ふくまへてあふ再あひ信進行長新の
あ

新
山を捜し入る山を
用いあつてあふ
あつて梳小鎌倉の山故及今ハあきも相あふ
山をさぬよう首実檢の山檢使預ひよあふ
あゆめぬともあふ目あふくは進及あふのあふ

ゆーけは 查一書くゆづらう
由及目山書方みぞんじまのりひふふれ
よう出使 今書傳を後さうし國書にまふおまはせらう
とも早く 查一書くゆづらう
ゆの山使 由良の勲 とも一國の者へさうし
言傳を別で昨日のやふを大のせつじつに
系略の仕方さうの詭言 查一書くゆづらう
まのトとて直本を交ひさうしむお徳人の着極ま
もたまたまおれの檢使に覺えし終りまは物早き同か

おととて一さんふ西の山より南の海にまはしつて
借ははさる想卷の終ふいつてさうしむお徳人の
次の物さうし安藤貞氏あやたけのさだうぢの傳ふしと又他はさうしむお徳人の
後まのさうし忠臣義経ちゆうしんぎさねの傳ふしと又後まの
さうしむお徳人の例の相利亭さうりていが書傳をさうしむお徳人の
さうしむお徳人の例の相利亭さうりていが書傳をさうしむお徳人の

正史實傳いろは文庫卷之四
終りつらふし條ひのあはせ

近日出版

金花きんが光説ひかりせつ

文治ぶんぢ伊達いだて深ふか

金龍山人

為永春水撰

傾城高尾けいせいこうごの十一代じゅういちだい記き古今ここんあつてくま異説いせつとあり
諸書しよしょをあつて拾遺しゆいあり一巻いっくわんあり大澤おほさわを
居いふもくして河津かづとつる中なかつ敷しきであつたまの人ひと傳でん次じ
一巻いっくわんあり一統いっとうの人ひと傳でん本ほんあり

全本五編十五冊

明治元年
辰十二月求之

久榮堂

封

